

D・H・ロレンスと

キャサリン・マンズフィールド

——一九二〇年二月の書簡をめぐって——

井上 義夫

ジョン・ミドルトン・マリ (John Middleton Murry) によれば、一九二〇年二月初め、D・H・ロレンスは、当時「メントンでひとり病みを養つてゐた」キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield) の許に、「怖ろしい手紙」を送りつけたといふ⁽¹⁾。この手紙の大凡の内容は、マンズフィールドのマリ宛書簡によつて窺ひ知ることができる。

今日ロレンスから手紙が届いた。私の顔に唾を吐きかけ、私に汚物を投げつけて、かう言ふの。「お前にはむか／＼する。自業自得の肺病で煮立つてゐるお前には、ぞつとする。……イタリア人がお前と関りにならうとしないのも道理だ」と。その他にもまだ沢山ある。これは私のお願ひ。——あなた私の夫なら、もう彼を弁護するのは止めて。今輪際、紙面で讃めちぎるのを止しにして。誇りを持つて！ 同じ手紙

で、結局あなたは「汚ならしい、小つぼけなみみず⁽²⁾」だと言つてゐるのよ。誇らしくして。こんなことがあつたんですもの、絶対に彼を許さないで。

問題のロレンスの書簡をマンズフィールドが回送してきたとき、マリは直ちにこれを焼き去てたと回顧する⁽³⁾。他方、マリの伝記を著したF・A・リー (Lee) によれば、一九三二年七月十一日のマリの日記には、「お前は胸のむかつく爬虫類だ。——死んでしまえばいい」といふ文章が書き写されてゐるといふ⁽⁴⁾。ここから、マンズフィールドの伝記作家アントニー・アルバーズ (Antony Alpers) は、この時点すなはち一九三二年七月までロレンスの書簡はマリの手許にあつたと推測する⁽⁵⁾。つまり、明らかにマリは回想記で事実を曲げたことになるが、これもまたマンズフィールドの伝記作家クレア・トマリン (Claire Tomalin) は、さらに進んで、問題の書簡にはマリにとつて都合の悪い事実が記されてゐたと示唆する。編集者としての訓練の賜物か、或いは第一次大戦中、情報局の検閲係を勤めた折の習性からか、マリは彼自身と彼に関りのあつた人間をめぐる資料の抹殺と部分的抹消を頻々と行なひ、そのためロレンスのこの書簡も、最悪の部分だけが残されることになつたといふのである。因みに、『ケンブリッジ大学版ロレンス全集』の書簡集第三巻の編者は、ロレンスのこの書簡の発信日を一九二〇年二月六日と推定し、引用出典をマリの編集になる『ミドルトン・マリ宛キャサリン・マンズフィールド書簡集 一九一三年—一九二

二年』四七〇頁とした上で、「キャサリン・マンスフィールドは、一九二〇年二月九日、マリー宛の手紙で次のように報せてゐる」との注釈を付して上記書簡を引いてゐる。ところで出典となった書簡集のなかの同書簡の推定日付は二月九日ではなく二月七日である。一方、マンスフィールドの『日記』の一九二〇年二月六日の欄には、「ロレンスの最後の手紙とJ〔マリ〕からの返信あり」といふ文章がある。従つてロレンスの書簡を彼女が落手した日付は、二月六日と推定してよく、ロレンスの書簡の発信日も二月三日以前に遡ることになる。

発信日の重要性は後述に譲るとして、一般にロレンスの伝記の決定版とみなされている『愛の高僧——D・H・ロレンスの生涯』を著したハリー・T・ムーア (Harry T. Moore) は、この手紙とマリーの回想記を引用し、何の注釈も加へぬまゝ、「カリブ島のロレンスは、平生にもまして不機嫌だつたやうである」とだけ記した。マリーの回想とは、「キャサリン宛のこの手紙はあまりに法外かつ極悪非道であつたから、私は彼〔ロレンス〕に書を送り、彼が許されざる罪を犯したと、私は本心から、私達が二度と目見ることがないやう希望してゐること、といふのもし再会すれば私は彼を打擲する羽目になること、を述べたのであつた」といふ、『D・H・ロレンスの思ひ出』のなかの文章である。

一九八四年十二月十三日、『タイムズ紙』(The Times) の書評欄は、紙面上半分の四コラム分を全集版ロレンス書簡集第三巻の書評に当てた。書評担当者ジェイムズ・フェントン (Ja-

mes Fenton) が最初に引用したのは、マリが「汚ならしい小さなみずのやうなことをしてゐる」といふマリ弾劾の書簡の一部へ一九二〇年一月三十日付、二番目の引用はマンスフィールド宛の問題の書簡である。フェントンはかう書く。

彼〔ロレンス〕は、彼女〔マンスフィールド〕の病ひが彼女自身のせむだと思つてゐた。それならば彼の病ひも自分のせむだと思つたのであらうか。その答へは第七巻に見出すことになるであらう。この巻におけるマンスフィールドへの言及のうち、最後に近いものに、『人々を威圧するため息絶え／＼の最後の足掻きをしてゐる』といふのがある。彼は、マンスフィールドの病ひばかりでなく、その才能をも羨んだやうである。

要するにフェントンは、ロレンスの生前に喧しく、一九五〇年代にも頻りに流布された「羨望」「嫉妬」の権化たるロレンス像をなぞり、彼を憫笑することによつて「卑しい」階層の出身者ロレンスに対する優越感を確認するといふ手垢にまみれた術策を採用したのである。彼は言はば、この三十年間の緻密な考証と研究の成果を帳消しにしようとする。高い志からさうする意図を私は評価する。あたかも興信所の調査に似た伝記研究と草稿の検討は、いつの日か根本から覆されねばならない。改めて文学研究とは何かと問ひ直す日は、もう真近に迫つてゐるが、フェントンはただ読者の下心をくすぐるためにさうする。

『タイムズ』紙のこの書評は、恰も第一次大戦中「敵性外国人狩り」に狂奔してロレンスを絶望させた頑迷固陋な同紙の紙風さへ彷彿させるのである。

幸ひなことに、一八八〇年代に生を享け、第一次大戦により近代ヨーロッパ文明の終末を目撃し、現代といふ時代の根本を問うた文学者たちの事跡は、日々刻々明らかになりつつある。それが二十数年前から始つたことは奇とするに足りない。T・Sエリオットを除けば、彼ら自身と彼らの配偶者がすべて鬼籍に入つたため、もはや生前の不祥事を糊塗し、過去を隠匿する必要がなくなつたからである。マリとマンスフィールドに関しても、彼らの生前が、フェントンが前提してゐる(かのごとき)清純無垢なものでなかつた事実は、マンスフィールドに関する二冊の伝記と、一九八四年に出版された『ドロシー・ブレット伝』⁽¹⁸⁾が白日の下に曝したのである。

モナコの東八キロほどのところに、海岸の保養地メントンがある。マンスフィールドがこの土地の療養所に入つたのは一月二十一日のことであるが、彼女は生涯の「伴侶」となつた女性アイダ・ベイカー (Ida Baker) を従へてゐたから、マリの記述とは異なり、「ひとり」ではなかつた。その彼女のもとにロレンスの手紙が届いたのは既に述べたごとく二月六日である。ロレンスの当時の滞在地カプリアから船でナポリに運ばれ、ローマを経て再び積み交へられる郵便物の経路と、一月末まで続いたストライキの余波等を考へれば、この書簡が二月三日以降に

投函されたかと考へることは不可能に近い。まづ二月二日以前に書かれたと思はれるが、一月三十日には、フェントンがその一部を引用した次のやうなマリ宛書簡が認められてゐるのである。

親愛なるジャック、

君の手紙とオスベダレットイから転送された返却原稿を受取つた。(I received your letter and also returned articles forwarded from Ospedatini.) 君が「その原稿を好まなかつた」ことは疑ふべくもない。ダービシャーから送つたのを、好まなかつたのと同じやうに。しかし真実の掃するところは、君が汚ならしい小さなみみずで、汚ならしい小さなみみずのやうに振舞つてゐるといふことなのだ。しかしこれだけは最後に言つておく。私はそのことを知つてゐるし、そんなことは今に始まつたことでもない。さうして二人の間でこのことは判然させておく。私は君を汚ならしい小さなみみずだと考へる、といふことを。だから、どこへでも好きなところに、君の汚ない悪意 (venom) を残して行けばいい。いづれにせよ、我々は何がどうなるかを知つてゐるのだから。

オスベダレットイは、イタリアとフランスの国境の東側十キロ余りのところにある村。マンスフィールドは、一月二十一日にこの村から国境の西約十キロのところにあるフランスのメントンに移つた。マリは、前年十二月十六日からこの年の一月二日までオスベダレットイに滞在してゐる。

返却された複数の原稿が何であつたかは確定できない。その内的一篇が、一九一九年の十一月末か十二月初め、フィレンツェからロレンスが送った「ダビデ」(David)であることはほぼ確実である。「ダービシャーから送った」原稿とは、少年の頃飼つてゐた兔をめぐる「アドルフ」(Adolf)であらう。

一九一九年三月、当時『アシーナム』(Athenam)の編集長となつたばかりのマリから投稿依頼を受けたロレンスは、「無署名あるいはペン・ネームを使つても構はない」と書いて、最大限の譲歩と協力の姿勢を示し、「鳥の囀り」(Whistling of Birds)と「アドルフ」を送つたが、マリは前者を匿名で掲載し、後者については、掲載拒否の事務的な手紙を寄越したにすぎなかつた。(「アドルフ」と共に、少年時代に飼つた犬のことを扱つた「レックス」(Rex)が送られ、この二篇が「デイヴィッド」と一緒にカプリ島のロレンスに返却された可能性も考へられる)。

当時ロレンスは赤貧洗ふが如き日々を送つてゐたから、この事件を契機に、一度は修復する兆を見たマリ、マンズフィールドとロレンスの関係は急速に悪化した。一九一九年十月一日(推定)コテリアンスキ宛書簡で、ロレンスが「K(キヤサリン)」が虫に喰はれて死んで了ふやうに祈らう」と書いたのはそのためであるが、にも拘らず十一月二十四日(推定)、ロレンスは、フィレンツェの様子を知らせる書簡をオスベダレットのマンズフィールドに送つた。(「ダビデ」の原稿が同じときに送られた可能性は大きい。)つまりそれは、ロレンスにとつ

て、マリ、マンズフィールドとの関係修復の最後の試みであつた。

ロレンスは、原稿却下にはマンズフィールドもまた関与してゐると考へた筈である。この推測は、毎週『アシーナム』の小説の書評を担当してゐたのがマンズフィールドであつた以上、自然な推測である。事実三カ月ほど後、『ニュー・エイジ』時代に彼女と親しかつたベアトリス・ヘイスティング(Beatrice Hastings)が編集所宛に投稿を希望する旨書き送つたことがある。マリは直ちにマンズフィールドに伺ひを立て、彼女の電報に接して掲載を一切見合わせる方針をとり、「遺憾ながら」といふ「事務的な手紙」を書いた。ロレンスが受取つたのと同じ趣きの手紙であり、その理由は、ヘイスティングが彼女の陰口を叩いてゐるといふところにあつた。

事実問題として、マンズフィールドがロレンスの原稿却下に関与してゐたかどうかは解らない。一見マリは巧妙に立ち回つたように見えるが、この両者の本能的と言ふべき独善と詐術は、甲乙つけがたいものがある。ここにその詳細を書き連ねる余裕はないが、後のロレンスの人生に関連する事柄を記せば、例へば問題のロレンスの書簡について告げた二月六日(推定)の手紙で、彼女は夫であるマリに対し、愛情が足りないと言つてかきどいてゐた。

さやうなら。この間の私の手紙への返事にはひどく失望してゐるけれど、私はそれに耐へねばならないのね。恥るとこ

ろはない、とあなたは言ふ。私は恥ぢてなどほしくないの。二十ポンドのお金も、手に入り次第送つたと言ふ。「二月一日が遅すぎた」と。二十ポンドなど地獄に落ちろ、だ。どうやらあなたは、血を流した人間のやうに思つてゐるみたいね。おれは出来る限りのことをした。だに運命とおれの要は待つてくれない、と。それは、まつたくの嘘。私の欲しいのは愛情と共感と理解。二月一日まで、すつからかんだつたの？ あなたには何も解らないだらうと思ふと、まるで悪夢のやう。

あなたのもの ウィグより

マリはその回想記で、あたかもロレンスの手紙がマンスフィールドを打ちのめし、その死期を早めたかのように述べる。無論さうでなかつたことを彼は知つてゐた筈である。問題の手紙が届いた二月六日の彼女の日記は、「ロレンスの最後の手紙とJ〔マリ〕からの返信あり」という文章のあと、「馬鹿まる出しの医者」から診察を受けたといふ類の文章が続くにすぎない。他方三日後の二月九日には、「地獄。ジャック〔マリ〕から手紙。余りと言えば余り。朝ぢゆう泣く。午後陽なたに坐り、——ああ！ 陽差がとても暖く、夏のやう。万事休す。私の夢は正しかつた」とある。

右の手紙は二月七日付(推定)のマリの手紙を指すが、その中で彼は、最近「集中力が純つた」ため「仕事にも愛情にも努力を要するようになった」と認め、己れの欠点を詫びながらも、「結局は、私たちが離れてゐるのがいけないのだ」と書いた。

マンスフィールドは、おそらく同じ日、「煩悶」(Angrish)という小説風の文章を日記に書き込んだ。

……残酷な——身の毛のよだつ氷のやうな冷酷さ。二度と自分には想像力があるなどと言はないで——。二度と、自分には愛する能力があり、憐みがあると言はないで。あなたは、永久に私を傷つける言葉を口にしたの。私は歩み続けねばならないけれど、あなたのために生涯の傷を負つたの。(中略) 彼は、彼が私を愛してゐると思ふかどうか尋ね、「己を捨てないでくれ」と言ふが、まるで完全に、その(捨てられる)用意ができてゐるかのやう。彼女は電文を書きおろす。彼は私を殺してゐる、寿命を縮めてゐる。彼は自由になりたい——それがすべて。

好意的に見れば、死期の近いマンスフィールドは、夫の愛情を確かめようとして絶望的な試みを繰り返してゐるやうに見える。その過敏な神経は、マリの書簡の行間を透視して、彼女をないがしろにする心を探り当てる。他方マリは、妻の期待に応へようとして奮闘しながら、思はず隙を見せてしまうかのごとくである。例へば二人の住む家を捜す目的で、マリが週末にサセックスを歩き回り、丘陵地帯の素晴らしさについて書き送ると(一月二十六日(推定)、彼女は「怖ろしく、傷つけられ」たから「もう手紙は書かないでせうよ」とマリ宛に書く(一月三十一日)。

かつてロレンス夫妻が住んでいたプルバラ (Pulborough) のメイネル家を訪ねた折に、「この家はむろん宮殿だ。……かういふ人達の富が僕は羨しいと告白せざるをえない。僕たちが、彼らよりずっとよくして住める種類の家なのだ」とマリは彼女に知らせた(27)。(一九一五年二月十六日)。その種の小屋を千五百ポンドを払つても買取らうとして、後は週末には家探しに奔走してゐたのである。マンズフィールドは、すでに外出も自由にならない彼女への氣遣ひを忘れ、広大なサセックスの自然を謳歌してゐる夫に我慢がならぬ——。そう考へられさうだが、真相は実は別のところにある。書簡の最後には、「お金の具合はどうだ——どうか知らせしてほしい」とだけ書いた夫の神經に耐へられなかつたのである。彼女は、メントン引越しに伴ふ経費を勘定に入れ、マリが、「もちろん月に十ポンドを提供する」と言つてくれると思つてゐた。この頃には年額三百ポンドに増額されてゐた父親からの援助も、彼女が「怪物」と呼び「人殺し」と罵つたアイダ・ベイカーを待らせての療養生活には十分ではなかつたから、夫であるマリの援助を期待したのである。アイダ・ベイカーは、結婚後もマリは「決して」キャサリンを「扶養しなかつた」と書いてゐる。「一緒に住んでゐるとき、彼らは費用を切半し、厳密に帳尻りを合はせた。むろん時折、プレゼントの交換はしたけれど」といふのが彼女の回想である。つまり金銭は、マンズフィールドにとつて、夫の愛情と切り離せない必須の要件であつた。他方、それに気がつかないかのとき、マリが、彼女に宛てた龐大な書簡集が示すやうに、妻の幸福

を願ひながら誠心誠意を尽してゐたのかと云へばさうでもない。マンズフィールドの読みが適中してゐたことは、のちにロレンスと深い関りをもつ女性ドロシー・ブレットの伝記が出版され、彼女の手記が公表されたいまは否定すべくもない。彼女とマリの間の特異な意識が芽生えたのはこの頃のことであり、三月八日になると「私が君を愛してゐることを君は知つてゐる。それは君が私を愛してゐることを私が知つてゐると同じだ」といふ手紙が書かれるようになる。二人の關係に氣づいたマンズフィールドが、「襟首の汚れた、齒に膜のかかつた」三十七歳の「ヒステリー」症の女への呪詛を、ひそかにノートに書きこむのは八月第三週のことである。

いまマリのために弁じれば、彼がブレットに慰めを求めた時期は、妻の猜疑に苛まれた時期と重なつてゐる。事柄の性質上、両者の原因と結果は判別しがたいのである。マンズフィールドからの手紙の調子に周章(まはて)たマリは、二月九日付(推定)書簡で一月分の収支報告を行なつた。妻に知らせてゐなかつたスーツの購入(六ポンド六シリング分)が発覚したことを別にすれば、月十ポンド以上を生命保険の掛金に費してゐる点が、いかにもマリらしい。この十ポンドを妻のための出費に充ててゐれば、果して二人の仲は破綻しなかつたかどうか——。

アルバーズによれば、彼女が結核に加へ、淋病感染の事実を知らされたのは、ロレンスがハムステッドのポートランド・ヴィラに彼女を見舞つた直後、一九一八年十二月のことであるといふ(28)。以降、完全に行動の自由を奪れた彼女は、狭い空間に押

し込められたまゝ、生来の意志の力と巧妙な術策で他人の人生を投乱しつつ、小説執筆の糧とするしかなかつたのである。

マンスフィールドは、約三年後、フォントテンブローにあるタルジュイエフ (George Ivanovich Gurdjieff) の療養所で咯血して死んだ。マリが見舞に訪れた夜のことである。ロレンスは一九二五年十二月、妻の重態を知らせる電報を受け取つてイタリアに急行する男を主人公にした短篇小篇「微笑」(“Smile”)を書いた。「*どうも自分のしたいやうにしてきた*」妻オフェリアは、かつて夫であるマッシュューを「愛し、頑なになり、十二度も彼の許を去り、頼りなげになるか、蔑むか、憤慨するかして十二度も夫の許に戻つてきた。」その妻の死体を眼前にしたマッシュューは、「いま込み上げてくる微笑を抑へることができなう。その微笑は、やがてオフェリアの死を看取つた尼僧達にも感染するが、彼女達ばかり、オフェリアの口元に「皮肉な」微笑みが浮んでゐるのを認めて吃驚する。「オフェリアには彼が見えたのだわ」と呟つて祈禱に入る」といふ話である。

(1) John Middleton Murry, *Reminiscences of D. H. Lawrence* (London: Jonathan Cape, 1933), p. 165.
 (2) Katherine Mansfield, *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry 1913—1922*, ed. John Middleton Murry (London: Constable and Company, 1951; reprint 1958), p. 470.

(3) *Reminiscences of D. H. Lawrence*, p. 165.
 (4) F. A. Lea, *The Life of John Middleton Murry* (London: Methuen and Company, 1959; reprint 1960), p. 83.
 (5) Anthony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (London: Jonathan Cape, 1980; Oxford: Oxford University Press, 1982), p. 310.
 (6) Claire Tomalin, *Katherine Mansfield: A Secret Life* (London: Viking, Penguin Books, 1987; reprint 1988), p. 188.
 (7) D. H. Lawrence, *The Letters of D. H. Lawrence*, James T. Boulton, gen. ed., 8 vols. (Cambridge: Cambridge University Press), 3: 470.
 (8) Katherine Mansfield, *Letters of Katherine Mansfield to John Middleton Murry 1913—1922*, John Middleton Murry, ed. (London: Constable and Company, 1951; reprint 1958), p. 470.
 (9) Katherine Mansfield, *Journal of Katherine Mansfield 1904—1922*, John Middleton Murry, ed. (London: Hutchinson and Company, 1954; paperback edition 1984), p. 480.
 (10) Harry T. Moore, *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence* (London: William Heinemann, 1974; London: Penguin Books, Pelican Books, 1976), p. 396.

- (11) *Reminiscences of D. H. Lawrence*, p. 165.
(12) *Times* (London), 9—14 May, 1915.
(13) Sean Hignett, *Brett: From Bloomsbury to New Mexico* (London: Hodder and Stoughton, 1984)
(14) *The Letters of D. H. Lawrence*, 3: 467.
(15) *The Life of Katherine Mansfield*, pp. 290—305.
(16) *The Letters of D. H. Lawrence*, 3: 346.
(17) *Ibid.*, 3: 401.
(18) *Ibid.*, 3: 421.
(19) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield*, p. 300.
(20) *Letters of Katherine Mansfield to John Middleton Murry 1913—1922*, p. 470.
(21) *Journal of Katherine Mansfield 1904—1922*, p. 198.
(22) *Ibid.*, pp. 198—99.
(23) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield*, p. 270.
(24) *Journal of Katherine Mansfield 1904—1922*, p. 199.
(25) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield*, pp. 256—58.
- (26) *Letters of Katherine Mansfield to John Middleton Murry 1913—1922*, p. 464.
(27) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield*, pp. 39—40.
(28) *Letters of Katherine Mansfield to John Middleton Murry 1913—1922*, p. 464.
(29) *The Life of Katherine Mansfield*, p. 295.
(30) *Ibid.*, p. 302.
(31) L. M. [Ida Baker], *Katherine Mansfield: The Memoires of LM* (London: Virgo Press, 1971; reprint with a new introduction by A. L. Barker, 1985), p. 135.
(32) *The Life of Katherine Mansfield*, p. 317.
(33) *Ibid.*, p. 318.
(34) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield*, pp. 271—73.
(35) *The Life of Katherine Mansfield*, p. 289.
(36) D. H. Lawrence, "Smile", *The Complete Short Stories*, vol. 2 (London: Heinemann, 1955; reprint, 1968).
(一) 藤大幸助執筆